

# 契丹陶磁の「周縁性」に関する検討（４）

## －西夏陶磁との関連から－

町田吉隆\*

Examining on the Border Character of the Kitai Pottery in China(4)  
: To relate with the Pottery of Xixia Dynasty

Yoshitaka MACHIDA

### ABSTRACT

We are able to find out an archaic style in the Kitai(契丹)Pottery. These styles are similar to the pottery in the Tang(唐)Dynasty rather than the pottery in the Nothern Sung(北宋)Dynasty of the same era(A.D.10-12c). In other words, the style of the Kitai pottery is the border character. This paper will survey the pottery of the Xixia(西夏) Dynasty. the Xi-xia Dynasty ruled over the Ningxia(寧夏) and the Gansu(甘肅) from the 11th century to the 13th century(1038-1234). the Kitai and the Xixia are alike in that it was cooperating while it was opposed to the Nothern Sung . It had influence on mutual at the culture of those countries. We will need to understand although the relation of those pottery is complicated.

*Keywords* : pottery, Kitai(契丹), Xi-xia Dynasty(西夏), China, history

### 1. はじめに

10世紀初めから12世紀初めにかけて華北の一部を含む北東アジアから内陸アジアにまたがる領域を支配した契丹国（遼朝，以下，契丹国と表記）の陶磁器のうち，その領域内で生産された陶磁器を，ここでは「契丹陶磁」と規定する。

契丹国の陶磁器には古風な特徴があることが指摘されている。それは10世紀から12世紀にかけて生産されたものであるにもかかわらず，むしろ唐代の陶磁器に類似しており，同時代の北宋時代の陶磁器とは異なる様式であることを意味する。そして，それはしばしば中心文化が地方へと波及する時差により遅れることを意味する「周縁性」として説明されてきた。<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup>

筆者はその「周縁性」について，

①唐代に盛行した器種（form）である「唾壺」や「陶枕」などが契丹陶磁にも見られるが，前時代の唐代とも，同時代の北宋時代とも異なる点が多いこと。

②低下度鉛釉陶器の技法は唐代の中原地域（陝西省・

\*一般科教授

河南省）の陶磁窯の影響を受けていることは間違いないが，その直接的な継承関係は器種や技法でも跡づけることは現時点では難しく，今後の検討を要すること。

③契丹陶磁を生産した陶磁窯は契丹国（遼朝）の都城造営に関連して，「官窯」的な性格を持っていたと推定されてきたが，必ずしも都城や州県城の造営・立地にもなつて発展した「官窯」ではなく，陶磁器の需要や購買層の成立により発展した陶磁窯の存在が先行し，「官窯」としての性格は二次的なものであったと思われること。

などから，契丹陶磁が周縁的な性格を有することは認めつつ，その「周縁性」には多様な要素が含まれることを指摘した。<sup>(2)</sup>

本稿では，同時期に契丹国の支配領域の西にあって，現在の寧夏回族自治区および甘肅省などを支配していた西夏国の陶磁器生産と契丹国のそれを比較し，両者の相違点と共通点の検討を通じて，その「周縁性」の多様な側面について考察する。

## 2. 西夏国の陶磁器

西夏は9世紀の初めに夏州（現在の内蒙古自治区と陝西省の境界に位置するオルドス地方）において勢力を拡大したチベット系党項族（タンゲート）を支配層とする国である。唐末の混乱期に国家を形成しようとした動きは契丹族と軌を一にする。

唐が滅び、宋が建国すると西夏は自立傾向を強め、1038年、李元昊が皇帝を自称し、国号を「大夏」とした。都が置かれたのは夏州の西、黄河に面した興慶府（現在の寧夏回族自治区の銀川市）である。宋は「大夏」を西夏と呼んだが、1044年の慶暦の和約以降、両国は共存体制に入り、1004年、契丹国（遼朝）と宋間に結ばれた澶淵の盟に始まる澶淵体制（マルチ・ステート・システム）の一翼を担うことになった。

これらの国々はしばしば政治的には緊張関係に入ったが、外交と通商による関係は保たれ、陶磁器などの商品も国境を越えてもたらされ、物質文化における交流が継続した。その一方、西夏文字や契丹文字など漢字とは異なる各国固有の文字が創造され、使用され、宋とは異なる文化的なアイデンティティを形成しようとしていたこともよく知られている。

そのような傾向は陶磁器についても見られる。西夏の陶磁器は現在の河北省北部・河南省南部に展開していた宋代の磁州窯系陶磁窯の影響を受けながら、西夏固有の特色も有していた。以下にその様相をまとめてみる。

## 3. 寧夏靈武窯

現在の寧夏回族自治区の中部、靈武県にあった靈武窯は現時点で確認されている最も大規模な西夏時代の陶磁窯である。西夏の首都・興慶府があった銀川市の南約50km、靈武県治から東約35kmの磁窯堡において、1984年から1986年にかけて行われた発掘調査により、窯炉4基、工房遺址は西夏時代8基、元時代1基が発掘、確認された。(3)(4)

出土した遺物総数は約3,000点に及び、各層からの遺物を分類した結果、銅銭「乾隆通宝」が伴って出土した清代の窯炉1基（2号炉）を除けば、3期に時代区分されることがわかった。第1期から出土した陶磁器の器種は金および南宋と類似しており、出土銅銭も北宋以外には西夏、南宋、金を下限とすることから、西夏時代中期にあたる11世紀末から12世紀末に区分された。第2期は遺物も少なく、技法においても優品が乏しくなることから1227年に滅びた西夏時代晩期12世紀末から13世紀初めの陶磁窯と考えられる。第3期は型式（type）が他の磁州窯系陶磁窯との比較から元時代の様式（style）と考えられる。その上限および下限は明確なところでは西夏滅亡から元朝成立の1271年をはさむ14世紀前半までと比定されている。明代、嘉靖十九年（1540年）重修の『寧夏新志』に「正徳初、

以非要冲之地，徒事糜費，乃撤之。今止慶府窯匠，軍余四十余名，并各處陶器者十余人居焉。」とあることから、16世紀前半には衰微していたとされる。

生産されていた器種（form）は碗、小皿、大皿、鉢、杯、盒、壺、甕などの飲食器一般、硯や水滴などの文房具、人形や陶器の笛（埙）および瓦当などの建築材料も多く見られた。第1期と第3期の堆積層はそれぞれ約2mに達し、その生産量はほぼ同程度と想定されるが、第3期は器種の種類や技法の数が少なくなり、精巧な白釉陶器が減少、建築材料を焼成しないなどの点が第1期とは異なり、靈武窯の陶磁窯としての最盛期は第1期、つまり西夏国の後期12世紀にあったと考えられる。

靈武窯の南方には現在も採掘されている炭鉱があるが、窯炉の調査によれば、窯口坑（ピット）の焼結面には煤炭層が堆積しており、第1期の時点で、すでに石炭を燃料として用いており、柴薪、つまり木材燃料が使用されていた痕跡は無い。靈武窯がある高地には現在は疎林も見られないが、1984年の発掘調査の際には、最高地点で発見された明代の烽火台も同時に調査しており、同地域は靈武窯の活動時期においても、すでに乾燥した半砂漠地であった想像される。

西夏時代の陶磁窯は、同じ靈武県内の回民巷、賀蘭県插旗口、銀川市の缸瓷井、甘肅省武威古城の塔兒灣窯などでも発見されている。そのうち回民巷窯は靈武窯のある磁窯堡北4kmにあつて、類似した陶磁器を生産していた。缸瓷井窯は白釉の板瓦と共に、磚も大量に見つかったところから、西夏王族陵墓の造営に当たって設けられた可能性もある。また、山西省と境を接する内蒙古自治区南部からも西夏陶磁の特色が見られる陶磁器が多く出土することから、同地域に未発見の陶磁窯が存在していることを指摘する意見もある。(5)

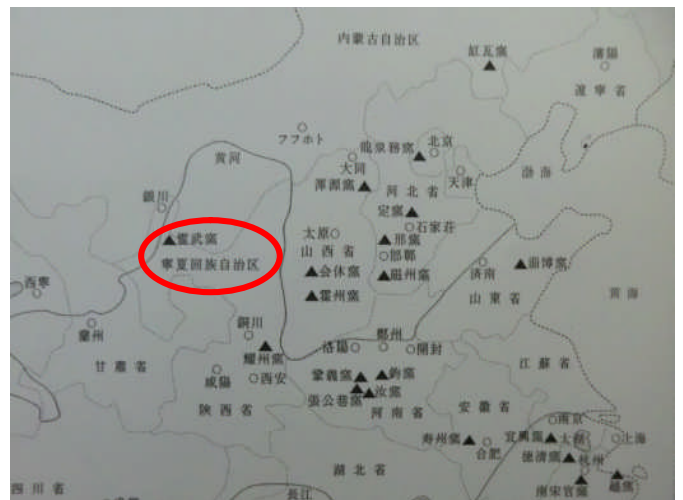


図1. 10-12世紀における中国北半部の陶磁窯址

（大阪市立東洋陶磁美術館『定窯一優雅なる白の世界 窯址発掘成果展』2013 所載地図より加工・転載）

#### 4. 西夏陶磁の特色

靈武窯の発掘調査以前には、今日、西夏陶磁と見なされている陶磁器群は磁州窯系とみなされてきた。<sup>(6)</sup>

磁州窯とは現在の河北省で窯址が発掘された観台窯をはじめとする、河北省南部、河南省北部で焼成された陶磁器群を指す。磁州窯系とは山西省の介休県や榆次県で見つかった窯址や、五代から宋代にかけて「北方青磁」と称されるオリーブ・グリーンの青磁を焼成していた陝西省の耀州窯でも類似の様式が見られることから、「10-13世紀の華北における酸化焰焼成された文様が施された陶磁器」とでも言うべき、幅の広い様式である。

西夏陶磁によく見られる酸化鉄を釉薬とする黒釉陶磁や鉄釉で文様を描く「鉄絵」、さらに黒釉陶器の胎土に彫刻して文様を表す「掻き落とし」（剔花）などの技法は宋代の磁州窯系に典型的な技法であるため、窯址が調査される以前においては、墓葬出土の陶磁器や博物館などに所蔵される伝世品が、12世紀以降の金代および元代の陶磁器と考えられていたわけである。



図2. 黒釉剔花経瓶（黒地白掻落とし）  
（靈武窯址出土・註(4)文献 p195 より転載）

これらの技法のうち、工程数の多い「掻き落とし」は10世紀-11世紀前半に磁州窯系で盛行した。また、この白と黒のコントラストを生かす手法としては、鉄絵具を釉薬の上から塗り込めた上から鉄絵具を削って

文様を描く「白地黒掻き落とし」などの技法も生まれた。白い陶磁器の表面に鉄絵具で文様を表す「白地鉄絵」は簡便に黒と白の文様を施すことができる。簡単にまとめると、白と黒のコントラストで文様を描く磁州窯系の技法は「掻き落とし」（剔花）→「白地黒掻き落とし」→「白地鉄絵」の順に工程数が少なくなる。手間の数が減るので、「掻き落とし」よりは「白地鉄絵」の方が、量産に適していると言える。磁州窯系の陶磁器は12世紀以降、「白地鉄絵」の技法が多用され、また、その文様もよく言えば洒脱、悪く言えば、通俗的に様式化したものが増え、様式論的に表現すれば、10世紀後半-11世紀の宋代をピークとして、衰退したと考えられている。

ところが靈武窯では第2期の西夏時代において、最も盛んに「掻き落とし」（剔花）や、さらに手間のかかる文様を削り描いた後に、くぼんだ部分に化粧土を充填して、器表面を滑らかにする技法が用いられている。11世紀に河北・河南で盛行した技法が、12世紀以降に寧夏で用いられたことは、西夏が宋代の文化を受容、様式や技法において遅れたと考える「周縁性」と取るべきであろうか。



図3. 白釉剔花鉢（白地白掻き落とし）  
（靈武窯址出土・註(4)文献 p198 より転載）

杭天氏によれば、靈武窯の胎土は河北の磁州窯系のそれより、鉄分が少なく、化粧土を胎土全体にかぶせて、焼き上がりを白くする手法を用いていないものが多いという。<sup>(7)</sup> ということは、白と黒のコントラストを描くために、わざわざ白化粧土を施していることになる。また、その表現は力強く、衰退しつつあった技法を模倣したものとは考えにくい。契丹国（遼朝）の陶磁器と同じく、西夏文化固有の発展、つまり「西夏陶磁」としての様式を持っていたと考えられる。

靈武窯出土の陶磁器を釉色別に分類すると、白磁が22.02%、青磁（ただし酸化焰焼成なので黄灰色を呈す）が21.18%、鉄釉を用いる褐色磁が37.81%、黒色磁12.93%である。つまりほぼ半分が鉄釉を用いた黒褐色

磁であり、「天目茶碗」を焼成していた宋代の建窯（現在の福建省）と同様、鉄釉に特化した生産を行っていた。



図4. 黒釉剔花鉢（黒釉地を掻き落とし、牡丹文の外縁に白化粘土を詰め込む）  
（霊武窯址出土・註(4)文献 p198 より転載）

『宋史』卷186・食貨志・互市舶法の条に「以香藥，瓷漆器，薑桂等物，易蜜蠟，麝臍，毛褐，獬犛角，礪砂，柴胡，菴蓉，紅花，翎毛，非官市者聽民交易，入貢至京縱其為市。」と宋と西夏の貿易品目を記し，また榷場（国境付近の交易場）での官貿易だけでなく，民間交易も認められていたことがわかる。ここでは西夏国は陶磁器を輸入していたとある。国内で生産される西夏陶磁との関係はどのようになっていたのだろうか。契丹国での事例では，契丹人貴族が輸入陶磁器を好む傾向があったのに対し，漢人の有力者がむしろ契丹国固有の陶磁器を使用していた。<sup>(8)</sup>

西夏国でも江南の青磁や景德鎮窯産の青白磁（影青）などを高級陶磁として輸入する一方，国内では西夏固有の陶磁器を用いる契丹国と同じような使用状況を想定できるのではないか。その検証のためには王族の陵墓だけでなく，領域内の墓葬や都城遺址の出土陶磁器の調査が必要となるが，窯址出土陶磁器から判明する霊武窯は単に西夏の宮廷用陶磁器を生産するためだけに設けられた陶磁窯ではなく，特色ある「商品」として流通する陶磁器を生産する窯場であったと言える。

## 5. 西夏陶磁と契丹陶磁

宋という産業経済大国の近隣にあって，西夏の陶磁器は磁州窯系の影響を受けつつも，固有の特色を有していた点で契丹陶磁と同じ環境にあったと言える。

執筆者はかつて契丹陶磁の特色を以下のようにまとめた。<sup>(9)</sup>

①遊牧民族的感覚。②西アジア（イスラーム文化圏）との関係。③同時代の華北諸窯（定窯，磁州窯など）との関係。④同時代他地域（渤海，五代，北宋など）

の文化的影響。⑤北朝から唐代へと続いた前時代文化が地方文化としての長く残存した可能性。⑥鮮卑など北東アジアの伝統文化との関係性。⑦金，元へと続く非漢民族王朝文化の先駆性。

これらの特性に注目してみると，西夏陶磁と契丹陶磁の間には相違点が多い。

まず，各陶磁窯の時代が異なることによる相違がある。契丹陶磁の代表的な陶磁窯である缸瓦窯（赤峰市松山区），龍泉務窯（北京市門頭溝区）は共に契丹国中期以降に生産が活発になったと考えられるが，12世紀に活動の第1期を持つ霊武窯よりもほぼ1世紀早い。契丹陶磁の「周縁性」の一つには唐代の陶磁器の器種，型式を直接的に継承している点があげられるが，西夏陶磁は北宋および金代の定窯，耀州窯，磁州窯系の影響が濃く見られる。

また技法においても契丹陶磁においては「遼三彩」と呼ばれる低火度鉛釉陶器が大きな存在を占めるのに対し，西夏陶磁にはこの技法は存在しなかったようだ。同時代金代12世紀の磁州窯系には三彩，緑釉，黄釉などの低火度鉛釉陶器が数多く見られ，西夏の霊武窯では磁州窯系からの影響を選択的に取り入れていたことがわかる。

また契丹陶磁の代表的な器種とされる皮囊壺（鶏冠壺）や牛腿瓶（鶏腿瓶）など遊牧文化と関係が深いとされる器種は西夏陶磁には存在しない。西夏の王族，支配層であったタングート族も遊牧民であったことから考えると，なぜ隣接する地域で作られていた契丹陶磁のこれらの器種を受容しなかったのか，その理由は定かではない。推測できることとして，モンゴル統治下に入った13世紀後半以降の華北の磁州窯や華東の龍泉窯および景德鎮窯などでも，このような器種は作られていないことから，遊牧の物質文化にモチーフを得たデザインは12世紀を境にして作られなくなった可能性は指摘できるであろう。

以上のような観点から見れば，契丹陶磁に比べて，西夏陶磁は遊牧文化や北東アジア，西アジアとの関連よりも，隣接する磁州窯系の影響が濃く，その伝世品に与えられてきた「磁州窯系の一地方窯」という従来の評価を首肯できる側面も有していた。

一方，両者には共通する部分も多く存在する。

第一に仏像や仏具などが多く作られていたこと。これらは両国ともに仏教を崇拝，重んじていたことに由来するだろう。

第二には釉色瓦や鬼瓦，鴟尾など建築材料を陶磁器と同じ窯で生産していたことがあげられる。このような例は唐代耀州窯においてはみられたが，宋代以降の磁州窯系や華東や華中の陶磁窯には見られない特色である。

第三には玩具や陶器の笛（埴）など日常生活に用いた陶磁器が共通して見られることがあげられる。<sup>(10)</sup>

硯や水滴など読書人を購買層とする陶磁器だけでなく、庶民の生活の中でこれらは用いられてきたことがわかる。副葬品（明器）として専造されたのではなく、生活の場で使用されたことは、唐宋変革期において、庶民文化が発達、それに伴い物質文化の面でも現れた変化が中央から地方へと徐々に波及したのではなく、地方においても早い段階で浸透していたことを示す資料となる。

第四には両者に共通する器種が後世に継承されたことがあげられる。たとえば唐代の金属器にモチーフを持つ折肩罐（肩が直角に近くすぼまる瓶）や花口瓶（星形や六角形の口縁部を持つ瓶）は契丹陶磁においても、西夏陶磁においても、優品が出土しているが、これらは元代の龍泉窯や景德鎮窯でも作られ、中国陶磁を代表する器種になった。また、先に西夏陶磁では遊牧文化に由来する器種は契丹陶磁に比べて見られないと述べたが、例外としては偏壺（胴体を扁平した円盤、楕円形の壺）は彼らが用いた水筒に由来する器種とされるが、双方でさまざまなヴァリエーションが作られた。これも元代以降、各地で焼造されて、普遍的な器種となった。



図5. 黒釉剔花扁壺（黒釉地を掻き落とし、牡丹文を線彫り、地の部分は露胎）  
（靈武窯址出土・註(4)文献 p207 より転載）

両者に共通して見られるが、宋代以降の磁州窯系の陶磁窯ではみられないのが口径40cmを越えるような盆（洗面器状の深皿）である。西夏陶磁では線彫りや片刃彫りで、契丹陶磁では線彫りに緑釉や黄釉を施したものが多く、一見して印象に残る特徴的な陶磁器で

あるが、後世には継承されなかった。

折肩罐や花口瓶のように前代から継承され、型式を変えながら定着する器種、遊牧文化に由来しながら西夏文化には受容されなかった皮囊壺や牛腿瓶と受容・継承された偏壺、契丹陶磁や西夏陶磁に特徴的な大盆など、器種ごとに受容と断絶を詳細に検討していくことも、契丹陶磁、西夏陶磁の「周縁性」を考える重要な要素となるであろう。

陶磁窯の立地に関して言えば、両者とも産炭地にあり、華北の磁州窯系に共通する特色である。窯炉の構造や生産技法などもよく似ており、これらの陶磁窯間に工人の移動を含む交流が存在したことは確かと思われるが、各陶磁窯の相違点、特に契丹陶磁と西夏陶磁のつながりについては具体的には不明なことが多い。

## 6. 山西の陶磁

両者の関係について、今後、注目すべきなのが、山西省に立地していた陶磁窯群である。

彭善国氏は西夏陵における耀州窯および旬邑窯など陝西省の陶磁窯の出土例から、装飾技法の上で西夏陶磁が受けた影響を指摘すると共に、黒釉や「掻き落とし」（剔花）の技法の点から山西省の陶磁窯の影響を指摘している。<sup>(11)</sup>

今日の山西省北部は、契丹国時代には、いわゆる「燕雲十六州」の一部として、雲州（現在の大同市）には西京大同府が設けられた。同地方は内蒙古自治区オルドス地方をはさみ、黄河湾曲部で寧夏回族自治区と結ばれる。山西省南部には介休、榆次などの磁州窯系陶磁窯があるが、北部の陶磁窯群はそれとは様相を異にしていたようである。

その一つ、大同市南郊の渾源窯について、馮先銘氏は古磁窯、青磁窯、大磁窯の3箇所の窯場址について、古磁窯は唐代、後二者は金・元代に比定している。また青磁窯、大磁窯については、大同市の青瓷窯や懷仁県鷲毛口窯での採集陶磁器とよく類似しているという。<sup>(12)</sup>

写真で見える限り、金代に比定される黒釉線彫りの陶磁器片は寧夏靈武窯の出土品とよく似ている。

一方、馮先銘氏は大同青瓷窯では契丹陶磁の代表的な器種である牛腿瓶（鶏腿瓶）が多く出土しているのに対し、渾源窯の窯場では全く観察されないと報告している。それに従えば、大同青瓷窯は契丹国時代の、渾源の青磁窯、大磁窯は金代以降の陶磁窯となるが、寧夏靈武窯は金元時代の磁州窯系陶磁器とは異なる特徴を有していることはすでに述べた通りである。杭天氏は内蒙古自治区南部に未発見、未調査の西夏陶磁を生産していた陶磁窯が存在していた可能性を示唆するが、現時点では詳細な発掘調査報告が発表されていない山西省北部および中部の汾水流域の陶磁窯についても、西夏陶磁との関連は大きかったことが想定される。

今後、詳細な調査報告を得て、改めて検討する余地があると思われる。

## 7. むすびにかえて

西夏の陶磁器が注目されたのは靈武窯の発掘調査報告が公刊された後、ここ30年余のことである。早く20世紀初めから知られていた契丹陶磁に比べれば研究史も浅いが、両者の間には共通する部分と共に相違点も多い。特に以下の2点については注意を要する。つまり、双方の陶磁窯が契丹国と西夏国という国家形成という背景がなければ、おそらく生産をこれほど活発には行わなかっただろう。と同時に、双方の国家が滅亡した12世紀および13世紀以降も陶磁器生産を続けていた陶磁窯であったことである。契丹陶磁と西夏陶磁という様式は王朝を越えて存続しており、契丹国と西夏国の断代史の中だけでくくって理解することはできないということである。その性格を理解するためには、器種の受容と変遷など美術史的な研究視点と陶磁窯の構造、燃料などに関する考古学的知見、契丹国と西夏国の時代10-12世紀をはさむ前後の時代を含めた両地域社会や経済についての歴史学的研究を総合する必要があるだろう。

そのための差し当たりの課題として、広く磁州窯系の陶磁窯群、未解明の部分が多いながら重要な関連を持つと思われる山西省の古窯址、さらには北東アジアや西アジアをも視野に入れて、おおよそ8世紀から14世紀までの陶磁器の歴史を考える必要がある。その中で、西夏陶磁はなぜそのような技法を用いたのか、契丹陶磁が選択的に受容、発展させたのは何か、という個別、具体的な課題を解明することが、その「周縁性」の全体像を捉えることにつながると考える。

## 註

- (1) 小川裕充「遼・西夏の絵画 総論」『世界美術大全集 東洋編5 五代・北宋・遼・西夏』1998, p.125.
- (2) 町田吉隆「契丹陶磁の「周縁性」に関する検討—唾壺と陶枕を例に」神戸高専紀要(48), 2010, pp.161-166.  
町田吉隆「契丹陶磁の「周縁性」に関する検討(2) 唐代の三彩窯との比較を通して」神戸高専紀要(50) 2012, pp.157-162  
町田吉隆「契丹陶磁の「周縁性」に関する検討(3) 遼代の都城・州県城制度との関連から」神戸高専紀要(51) 2013, pp.161-164
- (3) 馬文寛『寧夏靈武窯』紫禁城出版社, 1988
- (4) 中国社会科学院考古研究所編『寧夏靈武窯発掘報告』中国大百科全書出版社, 1995
- (5) 杭天『西夏瓷器』文物出版社, 2010, p71
- (6) 長谷部楽爾「金代の陶磁」『世界陶磁全集 13 遼・金・元』小学館, 1981, p256.
- (7) 前註(5) p64.
- (8) 町田吉隆「遼墓出土契丹陶磁に見られる契丹国(遼朝)社会の階層性について」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』31 大谷大学真宗総合研究所 2014, pp. 64-71
- (9) 町田吉隆「契丹国(遼朝)の陶磁窯とその特色」『契丹陶磁—遼代陶磁の資料と研究—』朋友書店 2009. pp.10-11
- (10) 李進興『西夏陶模』寧夏人民出版社, 1998
- (11) 彭善国「西夏制瓷手工業述論」p195  
『遼金元陶瓷考古研究』科学出版社, 2013, pp.189-197
- (12) 馮先銘「山西渾源古窯址調査」『中国古代窯址調査発掘報告集』文物出版社, 1984, pp.416-421